

平成26年度 弘前大学グローバル人材育成事業

学生海外PBLプログラム実施計画

行動中心主義複言語・複文化プロジェクト：「弘前×ボルドー」プロジェクト

1. 位置づけ

「弘前×フランス」プロジェクト（弘前大学人文学部「複言語・複文化教育プロジェクト」〔フランス語モデル〕）の海外プログラムとして位置づけ、2015年度から試行する同プロジェクトの授業化（プロジェクト型地域志向科目：欧米文化コース特設講義「地域と世界をつなぐ」）とあわせ、新入文学部カリキュラム案「多文化共生コース」や「トラベルスタディーズ」について、海外PBL、海外短期研修の可能性・成果と課題を検証する機会としても活用する。プログラム終了後、参加学生全員に報告書（PBL自己評価とプログラムそのものについての課題、改善点）の提出をもとめ、それらを総括した報告を学部長に提出する。

2. 事業目的

①地域の文化を調べて発信する活動、②現地学生との協働作業と交流活動、③現地の文化と伝統についての取材活動 をつうじて、外国語の運用能力の実践（あるいはそれを高めることへのモチベーション向上）、複眼的・多元的思考へと結びつく多様性の認識、「地域を知り、それを世界とつなぐ力」、「世界を知り、それを地域につなぐ力」を育てることを目的とする。

3. 事業概要

【旅程】

09/02/15	1700	1825	Aomori-Haneda	Avion	
10/02/15	0030	0530	Handeda-ParisCDG	Avion	
	0910	1025	ParisCHD-Bordeaux	Avion	PBL(préparation)
11/02/15			Bordeaux		PBL(préparation)
12/02/15			Bordeaux		PBL(préparation)
13/02/15			Bordeaux		PBL(préparation)
14/02/15			Bordeaux		PBL(présentation/enquête)
15/02/15			Bordeaux		PBL(présentation/enquête)
16/02/15			Bordeaux		PBL(présentation/enquête)
17/02/15			Bordeaux		PBL(réflexion)
18/02/15	0918	1237	Bordeaux-Paris(Montparnasse)	Train(TGV)	
	1345	1528	Paris(St-Lazare)-Lisieux	Train(CORAIL)	
	1643	1658	Lisieux-Mézidon	Train Local	
			Mézidon-Beuvron en Auge	Taxi	
19/02/15			Beuvron en Auge		PBL(Interview/enquête)
20/02/15			Beuvron en Auge-Mézidon	Taxi	
	0959	1019	Mézidon-Caen	Train Local	
	1151	1345	Caen-Paris(St-Lazare)	Train(CORAIL)	
21/02/15			Paris		PBL(Interview)
22/02/15	1855	1455	ParisCDG-Haneda	Avion	
23/02/15	1830	1950	Handeda-Aomori	Avion	

【課題1】：地域を知り、それを世界とつなぐ

① 地域の文化を調べて発信する活動＋②現地学生との協働作業と交流活動
学生目線でセレクトした「学生版玉手箱」。手工芸品の実物展示、地域文化・風習・場所を選んでレイアウトし、地域の魅力を発信。これまでの活動で製作したリーフレット、「弘前直送便セレクト集」等の発行物も持参し、活動そのものも発信。おもにボルドーで実施。

【課題2】：世界を知り、それを地域とつなぐ

② 現地の文化と伝統についての取材活動＋②現地学生との協働作業と交流活動
ボルドーでは現地学生との協働作業と交流活動を通じて「ボルドー」の魅力を紹介してもらい、ブーブロン・アン・ノージュ村では、現地での取材活動・インタビュー、現地での交流活動をつうじて、パリでは現地での交流活動をつうじて、それぞれの地域の人、文化・風習、物産などを知る。帰国後は、HP やリーフレットで発信したり、来年度フランス祭などのイベントの新規提案につなげる。

パリでは、英国系チェーンのホステルの大部屋に宿泊し、さまざまな地域からやってきた旅行者との交流（英語でのコミュニケーション）をつうじて、さらに多様な世界を体験する。

4. 派遣者

学生 3名

3年 細川敬介 (Paul)

2年 鈴木実世 (Elise)

2年 成田早紀 (Sierra)

随行教員：欧米文化コース 熊野真規子、小野寺進

5. 実施期間

2015. 02. 09～2015. 02. 23 15日間

学生海外PBLプログラム

行動中心主義複言語・複文化プロジェクト：「弘前×ボルドー」プロジェクト

実施報告書

弘前大学人文学部3年

細川 敬介

このたび、下記の通り海外PBLプログラムを実施しましたので、ご報告申し上げます。

1. PBLにおける事前活動

① 目標：

フランスで行う交流イベントを滞りなく行うために可能なこと、やるべきことを見定め、準備を進める。

② 成果：

自らが活動の計画・運営の主体となるという経験から、責任を負うということ、ともに活動する人々と連携することの必要性、重要性を認識することが出来た。

③ 課題・改善点：

動き出しが遅れ、イベントに対する準備が明らかに不足していた。理由としては、協働する者との連携(個々人が行っている活動の把握など)の不徹底や、活動に対する意欲不足(プロジェクトに対する動機が不鮮明)が挙げられる。学生同士の情報共有を怠ったために、事前の準備活動が遅れてしまった。

プロジェクトに参加する学生たちが、まず行わなければならないことは、なぜ集まり、どのように活動していくのかを理解することである。

改善するには、プロジェクトに参加する学生に対して、学生自らが設定したテーマや行いたいことを話し合い、目的を共有する場を第一に用意する必要がある。

2. ボルドーでのイベント、交流(2/13, 弘前紹介イベント@日本館)

① 目標：

わかりやすい日本語で、私たち学生が感じた弘前の魅力を伝える。

② 成果：

突発的に決まった本イベントは日本語を学ぶ人々に対して行われた。ここでは伝えることの難しさを痛感することが出来た。伝えるに足る十分な知識を持ち合わせなければならない。

③ 課題・改善点：

自己紹介程度しか互いの言語を話せないレベルであった。そのため、私た

ちは出来るだけゆっくりと、わかりやすくやさしい日本語を使わなければならなかったが、いざそれを使おうとしても言葉に詰まってしまった。日本語を適切に使用できなくては、他の言語を十分に活用できるはずがない。言語習得においては、日本の文化や言語もまず理解する必要があると実感した。

3. ボルドーでのイベント、交流(2/16, 弘前紹介イベント@Café Japonais)

① 目標：

文化の異なる人々と、心的距離をなくして文化交流を図る。

② 成果：

少なからず残っていた海外の文化を理解する抵抗は、ボルドーの学生と交流し、対話することで消えていった。異なる文化背景を持つ者同士が心を通わせるには、言語よりもまず、目を見て話そうとすることが重要である。他の文化を知りたいという関心意欲も増していった。

③ 課題・改善点：

交流したボルドーの学生のほとんどは日本語を学んでおり、交流する際には日本語で会話をし、展示物(弘前の文化を紹介するための物)をフランス語で説明する文章を書きたいときも快く協力していただいた。ボルドーの学生が私たちの母語である日本語を使って話すのは、日本の文化を理解し尊重する姿勢を示してくれた証であろう。現代はグローバル化した世界だと言われるが、異なる文化背景をもつもの同士が交流するには、その相手の文化(語や慣習、環境など)を尊重し、学ぶことを重視する必要があると感じられた。

4. ブーヴロン・アン・ノージュでの活動

① 目標：

普段触れていない分野(農業・環境)に対し、学ぶという関心を抱く。弘前との共通する課題を見つけ、それに対する対策を思案する。

② 成果：

日本にいたころは、大した関心を抱いてはいなかったが、プロジェクトに携わったことで、様々な分野に関心を持てるようになった。気になることは英語で質問することが出来て、積極的にコミュニケーションをとろうとする意思が芽生えた。

小さい村ではあったが、美しい場所であった。並々ならない努力をしている話を聞き、持続することの苦しさ、それを上回るほど地域を誇りに思っている姿勢が印象に残った。厳しい社会で課題に対して対応するその姿を、見習わなければならないと感じられた。

③ 課題・改善点

伝えたいことは、やはり自らの母語でしか伝えることはできない。熱意をもって私たちにシードルの歴史や作成方法を説明していただいたが、自力では理解できず、また会話も拙い英語でしかしなかった。誠意に対して、誠意を示せなかったことが非常に残念であった。

間違いを怖れるのではなく、まず相手に対して言葉を理解しようとしている姿勢を示さねばならない。

4. 自己評価(満点：100点)

・事前活動 50点 計画性がなかった。情報共有を怠ってしまった。反省必要。余裕をもって時間設定(数か月前からの始動)、チーム全員の役割を明確にすることが必須。

・協働作業 70点 学生が互いにストレスを抱えることなく、チームである認識を持ち続けるための潤滑油的な貢献はできた。しかし、情報共有や、どのように動けばいいかなどの指示を怠ってしまい、結果イベント全体の動きが統一した意思を持ってないまま終わってしまった

・交流 80点 挨拶、笑顔を欠かさなかった。現地であった学生と仲良くなることが出来た。また、現地の学生と英語で会話をすることが出来た。語学力はまだまだ。意思疎通を満足にとれなかったため、学習する意欲がでてきた。

5. 海外PBLへの感想

自らの学習意欲が大きく向上したプロジェクトであった。学生が主体となり責任を負うことで、自らの学びたいものを実施出来ることと同時に、計画を練って協働すること、全く面識のない人とも接することで社会という場を認識するプロジェクトであった。行ってみなければわからない知識、考えがあることを肌で感じる事が出来た。

以上

平成27年2月27日

学生海外PBLプログラム

行動中心主義複言語・複文化プロジェクト：「弘前×ボルドー」プロジェクト

実施報告書

弘前大学人文学部 2年
鈴木 実世

1. PBLにおける事前活動

① 目標

PBL プログラムの実態への理解と少ない時間の中イベントが形になるよう、イベントの内容形成、物産の交渉に努める（自分の仕事は迅速に行う）

② 成果

津軽藩ねぷた村と S nail へのスムーズな交渉と物産の提供を実現することができた。

③ 課題・改善点

全体的にイベントの内容を決定するまでが遅く、全体での打ち合わせも遅かった。また、全スタッフのイベントに対するイメージ共有ができていなかったことが挙げられる。その結果、企画書の作成が大幅に遅れ、イベントの実施場所等に関する協力の交渉に支障が出たため、フランスで直接交渉することとなった。

しっかりとした計画を立て、イメージを共有することと、早めの交渉（特にフランス人との交渉は3か月前から）を行う必要がある。

2. ボルドーでのイベント、交流

① 目標

イベント：イベントの実現と展示物の配置とその説明文（フランス語）を早めのうちに終わらせる。

交流：自分の殻に閉じこもらずにボルドー第三大学の学生とコミュニケーションをとる。

② 成果

イベント（日本館）：本来 Café Japonais だけのイベントを予定していたのが、日本館での日本語講座生との交流と弘前の紹介を行えた。外国人学習者相手に説明を行うことは大変だったが、積極的に学習者の皆さんが質問してくださるなど、最終的に弘前に興味を持ってくださったようで、良い交流イベントとなった。今後弘前に行くつもりだと言ってくれた方もいた。

イベント（Café Japonais）：フランス滞在初日で場所を確定することができた。予想以上にボルドー第三大学の学生に参加していただき、イベントとして一応成功できた。

交流：ボルドー第三大学の学生と交流する機会が多く、自分から英語やフランス語を使うことができ、モチベーションが向上した。また、交流によって、フランスの習慣や生活、常識といったフランスの奥深い部分を知ることができた。

③ 課題・改善点

準備段階において、全体として個人作業が多く、全員で話し合う回数が少なく、準備段階やイベント本番で（留学生への協力要請など）人に頼ってしまうことが多かった。

イベント（日本館）：日本語でわかりやすく相手に説明することが難しく、熊野先生に頼ってしまったところがあった。弘前や物産の説明の仕方（説明する物産の順番など）がまとまっていなかったため、計画性のないまま説明することになってしまった。

イベント（Café Japonais）：イベント当日になって、店内での展示場所が変更になってしまい、スペースが少し狭くなったこともあり、準備に時間がかかりすぎてしまった。始まった後も事務的な仕事をしていたため、ボルドー大学生との交流が少なかった。アンケートの取り方の認識が我々三人の中でそれぞれ違っていたため、不明瞭なアンケートとなってしまった。

全体の改善として、まずスタッフの間でしっかりと話し合いを行い、担当したものの説明の手順を書類として作っておくことと、トラブルなどを想定することが挙げられる。

3. ブーヴロン・アン・ノージュでの活動

① 目標

役場の方々に綿密なスケジュールで対応していただいたことを最大限に生かし、大使的な立場で村の活動やシードル文化について知り、弘前で紹介できるようにする。

② 成果

『フランスの最も美しい村』（“Les plus beaux villages de France”）ということで、その称号を剥奪されないための村の維持、村の存在をほかの地域へ発信する努力や村の文化を詳しく知ることができた。また、人々の村への誇りを感じた。

③ 課題・改善点

フランス語がほとんどできない学生のために英語を使ってくださったにもかかわらず、翻訳をほとんど熊野先生に頼ってしまい、すべてを正しく理解できたか疑問である。語学力の低さが反省すべきところ。フランス語や英語で積極的に会話できなかった。

改善点として、せめて英語だけでも理解できるようになるための勉強が必要であることと、文法が間違ってもひるむことなく、質問や意見を話すべきである。もっとメモを取るべきである。

4. 自己評価

準備：60点

時間が少なかったこともあるが、やはり準備が満足にできなかった。迅速な行動と情報共有の大切さを知った。

イベントへの貢献：70点

物産提供の交渉は早く行え、そのほかの準備にも貢献はできたと思うが、個人的に気づいたことなどをすぐに話していれば、もっと早くイベントの準備ができたと思われる。また、自分でやらずに、他の人に頼ってしまうこともあった。(物産の説明や準備などで)

外国語力：65点

学生や一般の人たちに対して、自分から話そうとする積極性は以前より増した。しかし、日常会話の簡単なものしか話すことができず、会話も必要最低限なものだった。

交流：60点

交流はある程度できたが、やはりどこか壁を作ってしまう、深い交流ができなかった。

フランスへの認識の変化：80点

実際にフランスに行って、日本とは違う国であることを改めて感じたが、デモといった様々なことが起きていても人々は普段と同じように日常生活を送っていることを知った。ニュースの情報だけを信用してはいけないことと、原発の問題があっても、日本人が普通に生活しているようにフランス人もほかの国から見て、今の状況は危ないという中でも普段の生活を送っているということを認識することが大事であることに気付いた。

5. 海外PBLへの見解

海外PBLというものがどういったものかよく理解できなかった。何を目的としていて、何を期待しているのかということについてもっと具体的に説明が必要であると感じた。時間がとにかく少ないため、イベントを行う学生たちのためにも準備期間を長くしてもらいたい。学生だけで活動するのは良いことだが、初めて海外を体験する学生にとっては、少々ハードルが高い。

最後に、PBLを通して、フランスのことをより深く知ることができ、また外国語へのモチベーションが向上し、充実した活動を送ることができました。

ありがとうございました。

平成27年2月27日

学生海外PBLプログラム

行動中心主義複言語・複文化プロジェクト：「弘前×ボルドー」プロジェクト

実施報告書

弘前大学人文学部 2年
成田 早紀

このたび、下記の通り海外PBLプログラムを実施しましたので、ご報告申し上げます。

記

1. PBLにおける事前活動

① 目標：

弘前市とその物産の魅力を紹介するための準備として早めの行動を心がけ、協力者（物産生産者、現地での協力者）に失礼のないように努力すること。

② 成果：

物産のピックアップ、またその紹介文を書くためのために資料を用意し、物産の特徴や作り手の気持ち、疑問点などをインタビューし早めにまとめることができた。

③ 課題・改善点：

PBL 活動を全員が同じイメージとして掴むことが遅く、準備が遅くなってしまった。

現地での開催場所の交渉、紹介文の作成、アンケートなどについてなどをその場で行ってしまったため、じっくり練ることや話し合ったことについて一致したイメージを全員で共有することが困難であった。もっと早い段階でイメージを固め、共有するべきだった。

2. ボルドーでのイベント、交流(2/13, 弘前紹介イベント@日本館)

① 目標：

イベントそのものでは、フランスの人が弘前のものを手に取り、弘前を知り、魅力を発見し、行ってみたいと思わせること。

交流に関しては、物怖じせず英語を使ってでも自分から向かっていくこと。

② 成果：

日本館でのイベントでは、弘前の魅力と物産を紹介し、参加者に理解してもらうことができた。そのうちの一人は、弘前に行くことも検討したいと言ってもらえることもできた。

③ 課題・改善点：

日本語を学んでいる参加者に対して、やさしい日本語を使うことができていなかった。母国語ではない言語での紹介について、相手の立場に自分を置き換えて考えることができていなかった。

3. ボルドーでのイベント、交流(2/16, 弘前紹介イベント@Café Japonais)

① 目標：

当日の準備活動をボルドー大学生協力者と行い、文化交流を図りつつ弘前の魅力を発信する。

② 成果：

カフェ・ジャポネでのイベントでは、ボルドー大学生を中心に魅力を伝えることができた。自分から疑問を抱いている人に寄って行き、コミュニケーションをとることもできた。

③ 課題・改善点：

フランス語の能力が低く特に交流の面では、日本語を学ぶ学生が相手であることに甘えてしまい、フランス語でコミュニケーションをとることが少なかった。心からの感謝を伝える時にとっても歯がゆい思いをした。それらを含め、本来であれば相手の言葉を使うのがマナーであると思われるため、外国語に対してもう少し努力しなければならない。

4. ブーヴロン・アン・ノージュでの活動

① 目標：

紹介を聞き、理解を深めること。またこの村と弘前のさらなる繋がりへの二歩目になること。

② 成果：

村の紹介について、事前に質問していたことで知りたかったことを知ることができた。また、微々たるものではあるがフランス語に耳が慣れ、話していることのニュアンスを理解することができた。

③ 課題・改善点

フランス語を聴き取る能力が未熟であるため、聞き逃した点も多かったように思われる。また、紹介を聞いた後の質問受付時間にはとっさに質問が浮かばず、自分の問題提起力が低いことが浮き彫りになったため、きちんと理解することや物事を深く考えることをしなければならない。

4. 自己評価

今回の準備行動に関しては、本当に取り掛かりが遅かった上に情報やイメージの共有がきちんとできていなかった。よって60点とする。

ボルドーでの活動と学生とのコミュニケーションに関しては、自分の異文化コミュニケーションへの関心もあり、進んで行動することが多かった。しかし、コミュニケーションの手段の半分以上が日本語であったことを考

えると 80 点とする。

ブーブロンでの活動と交流では、自分の弱点を再確認したこと以外には、緊張もあり引っ込みがちであったことが大きい。よって 60 点とする。初めてだからこそその失敗もあったが、それ以上に得るものが多かったので、総じて 70 点とする。

PBL への見解

弘前市と大学から学生に求められていることがあいまいであった。学生がどのくらいの負担になるのか、どのくらいの助成が受けられるかの知らせが遅く、参加できるかどうか決断するのが少し難しかった。

以上

平成 27 年 2 月 27 日

→次ページ：随員教員による観察と所見

1、教員の同行について

参加学生は、一年間の「弘前×フランス」プロジェクトの活動をつうじて地域の人々の取材や連携から多くを学び、一般学生よりはるかに社会人力をつけて望んだが、海外経験のある4年生が辞退した結果、参加学生が全員はじめての海外で、フランス語も初級レベルであったこと、初めての海外 PBL であること、現地学生がプロジェクト学習に慣れていないこと（フランスはバカロレアの論文試験、哲学の問題に見られるように、議論する力、批評する力、考察する力、講義や書物をつうじた学びを尊重しており、グローバル化の波で企業研修などは取り入れられているものの、社会的なかわりを経験するのはアルバイトくらい）など、旅行や語学研修ならまだしも、教員が随行しなければプロジェクト全体を成し終えるのは難しいと思われた。

4年生が参加できていたとしても、展示会場の問題（有料であった場合の対応など）や、現地学生に協力を仰いでも、せいぜいキャンパス内のことを依頼できるかどうかというレベルであること、印刷・コピーなどの不便（紙代、印刷・コピー代が高い、日本のように簡単には見つからない）、事務組織のあり方（結局、ボルドー大学では授業・テストをまだやっており、キャンパスに学生・教員はいたのだが、事務だけがヴァカンスに入っているなど）、フランスでは日本のキャンパスライフ、サービスのように便利にはすすまない。教員の同行なしで「提携校学生」との協働を条件とするならば、提携校に PBL 授業等がなければ学生にはハードルが高い。

2、学生の PBL プログラム遂行について

「弘前×フランス」プロジェクト（弘前大学人文学部「複言語・複文化教育プロジェクト」〔フランス語モデル〕*2015年度からプロジェクト型地域志向科目：欧米文化コース特設講義「地域と世界をつなぐ」として授業化を試行する）の海外プログラムとして位置づけ、①地域の文化を調べて発信する活動、②現地学生との協働作業と交流活動、③現地の文化と伝統についての取材活動をつうじて、外国語の運用能力の実践（あるいはそれを高めることへのモチベーション向上）、複眼的・多元的思考へと結びつく多様性の認識、「地域を知り、それを世界とつなぐ力」、「世界を知り、それを地域につなぐ力」を育てることを目的として、事業を実施した。

イスラム国テロ事件の影響で家族の理解をどうしても得られなくなった学生 2名（4年生）が出発の迫った時期に辞退を決意し、企画担当だった2、3年生3名のみで事業を実施する結果となった。

【課題1】：地域を知り、それを世界とつなぐ（①地域の文化を調べて発信する活動＋②現地学生との協働作業と交流活動）

学生目線でセレクトした「学生版玉手箱」。手工芸品の実物展示、地域文化・風習・場所を選んでレイアウトし、地域の魅力を発信。これまでの活動で製作したりフレット、「弘前直送便セレクト集」等の発行物も持参し、活動そのものも発信。おもにボルドーで実施。

事前活動：「弘前×フランス」プロジェクト月一まちなか企画の1月イベント準備・実施・報告期間に重なった2年生女子2名、「学都弘前」助成金報告書提出時期に重なった3年生男子1名は、期末試験・レポート期間の過密なスケジュールをぬって、企画を分担し、地域（弘前市）について発信するために自分たちが選んだ物産等の製作者・生産者に企画書を持参の上、物品の提供を受けるという出発前準備から事業はスタートした。アポイントをとり、自分たちの思いを伝え、協力を得ることについては1年間のプロジェクトの成果があらわれ、スムーズに大人の理解と支援を受けることができていた。

現地活動：現地学生との連絡、会場候補を見つけるのは4年生の分担であったが結果を得ることができず、会場未定のまま現地ボルドーに到着。24時間の長旅の荷ほどもせぬまま現地交渉に出かけ、利用許可された時間が2時間半のみになったものの初日のうちに希望場所での展示が決まった。紹介された「Maison du Japon 日本館」館長の進藤氏とのアポイントの結果、今後ボルドーでPBLを行う場合の会場協力を得ることができるようになったこと、このたびも急遽、現地社会人の通う日本語教室での発表と交流の機会を提供いただけたことは今後のPBL活動にとって成果である。科学者や大学教員など通常であれば緊張してしまう相手との交流だったが、互いが互いの言語の初級者であったことからか、学生もフランス語を使う場面でもものおじせずに発話できて自信につながると同時に、わかりやすい日本語で「弘前」を紹介することで、相手の立場にたちながら説明することの難しさも経験できたことが、大きな学びになったようである。

到着3日めに互いに連絡が噛み合わなかったボルドー大学学生と合流でき、日本語クラブ Ôyashima「大八島」の紹介を受けたことから、展示会のタイトルについてフランス語を添削してもらったり、WEB上の告知、展示会当日の準備に手を貸してもらえることになったりと、プロジェクトらしい展開になったのは幸いであった。展示会当日は、展示許可を得ていた場所が急遽変更になったり、展示時間帯が日本語専攻学生のテストの時間と重なったりと予定通り行かない点もあったが、はじめて具体的な形で弘前を発信でき、大いに関心を集めることができたのは学生の努力の成果と言える。

【課題2】：世界を知り、それを地域とつなぐ（①現地の文化と伝統についての取材活動＋②現地学生との協働作業と交流活動）

ボルドーでは現地学生との協働作業と交流活動を通じて「ボルドー」の魅力を紹介してもらい、ブーヴロン・アン・ノージュ村では、現地での取材活動・インタビュー、現地での交流活動をつうじて、パリでは現地での交流活動をつうじて、それぞれの地域の人、文化・風習、物産などを知る。帰国後は、HP やリーフレットで発信したり、来年度フランス祭などのイベントの新規提案につなげる。

Maison du Japon「日本館」の館長である進藤氏から、ボルドーについての深い話を伺うことができ、進藤氏が執筆されたボルドーガイド（ガイドといっても、ボルドーという土地の精神性、日本人の行動がどのように見られるかなどにも触れた著作）を全員が頂戴して勉強に役立てることができた。

またボルドー大学の大八島クラブとの出会いの後は、献身的なまでに「弘前×フランス」プロジェクトの主旨にかなう交流の提案をしてくれたことによって、来年度のフランス祭のボルドー紹介に向けて多くの収穫を得られた。ボルドー大学の日本語学習者は年々増え、今年度は1年次生だけで200人ほど、日本の提携校に留学できるのはその1割に過ぎないことから、今回のように日本（弘前）から訪問団が来て学生と交流できる機会は先方にとってもとても貴重な機会であることがわかった。交流をきっかけに大学院留学先を弘前大学にかえることを検討しはじめた学生もいた。

また、次の訪問地のブーヴロンでは、私たち一行を歓迎してくれたカンプルメール地区観光局代表のクリスチャン・ボサール氏、ブーヴロン・アン・ノージュ副村長アラン・ベルジェ氏（ジャン＝ミシェル・ラヴェル デティエンヌ村長は海外出張につき会えなかったが事前に丁寧な歓迎のメールをいただいた）、前村長ミシェル・カファール氏から、事前に質問した内容に応じていただくだけでなく、先方からも弘前についての少なからぬ質問を受け、シードルの技術提携締結だけでとどまっている弘前とブーヴロンとの交流の将来、ツーリズムのあり方、その不断の努力について取材し意見交換できたことはたいへん有意義であった。また、市役所りんご課からの要望とは別に、「弘前×フランス」プロジェクトとしてのヴィジョンについて快い賛同を得ることができ、来年度のフランス祭でのブーヴロン紹介に役立てるようにと、USBに入れた観光協会の貴重な写真データ、ポスターなどを頂戴したほか、シードル醸造見学のオフシーズンであったにもかかわらず、2カ所の対照的な生産者を案内していただき、日本とは異なるシードル用りんごの品種、栽培法、収穫法、醸造法など取材させていただけたことで、来年度以降のフランス祭に向けて多くの情報を市民に提供できることとなり、市のシティープロモーション担当、りんご課との今後の交渉、提案にも成果を得ることができた。

<https://www.facebook.com/media/set/?set=a.816756925039058.1073741856.251112538270169&type=3> ←Facebook【海外PBL】アルバム（各写真に説明付）

その他活動の様子





3、海外 PBL プログラムという制度について

本来学生のみで実施するプログラムであるとのことから、教員は引率ではなく極力随行に徹したが、語学力の問題もあり、「短期間で結果を求める」なら最終的な段階ではサポートが必要であると考えた。学部からの助成と教員個人の教育研究費をあわせて同行したが、提携校に PBL 型授業が準備されていない場合は、同行教員の渡航費の助成も海外 PBL プログラムとして今後検討すべきである。あるいは、ブーヴロンでも指摘を受けたが、語学の上達なら 6 ヶ月は必要であるので、「提携校学生との共通の課題解決」という二重の高いハードルを設けず、短期語学研修への渡航費助成にする方がよい。

いずれにせよ、「グローバル人材育成」についての大学の考え、市の考え、商工会の考えがわかりづらく、ヒアリングの質疑応答の印象もまちまちで事務方のとらえ方・応答にもあいまいさを感じられ、学生たちに明確なビジョンを与えることが難しかったことから、出発間際まで学生にも戸惑いがみられた。

私個人が本プログラムへの応募に際して最も重視したのは複眼的・多角的思考・発想へと結びつく多様性の認識、多様性の受容（異文化に対して胸を開いていく感性の育成）、ツールとしての語学ではなく相手をより深く知りたいという気持ちに支えられた現地言語への学習意欲、地域を知り、地域を発信し、受け取ったものを地域に還元するという世界を地域へつなぐ気持ちを育成するということである。そのために今回のようなプログラムを計画したが、到着日、移動日、帰国日、ストやトラブルなどのリスク対応のために余裕をみた 1 日についてもどんなプロジェクトを行うのか逐一求められ、過密なスケジュールになったため、もともと滞在の長かったボルドーでさえ、ぶどう畑やシャトーを訪れての取材もできない多忙さであった。学生だけでプログラムに挑戦させるのであればなおさら、ミスやトラブルに対応できる、ある程度の余裕を認めた方が成果をあげられるだろう。

「グローバル人材育成」と銘打つのであれば、今回のようにまずなんらかの地域

プロジェクトで社会人基礎力を身につけた学生を候補にしなければ、短期で成果は期待できないであろうと考える。逆にグローバルからローカルをめざす可能性は、長期留学でなければ難しいだろう（ただし、長期留学をしたからといっても、グローバルになれずに帰国する学生もいることを忘れてはならない）。

4年生の辞退によって、今回の参加学生は2年生と3年生になったのだが、1年次後期～2年次という早い段階で地域でのプロジェクトを経験し海外PBLに参加できた学生は、自己評価もきびしく、外へと開かれた眼差しで3年次前期のプロジェクトに貢献でき、高まったモチベーションによって語学への取り組み方が変化するなど、あと2年の成長が期待できることを考えると1年次後期～2年次に地域でのプロジェクトを経験し、2年次年度末に海外PBLに参加するというのは有効なプログラムのあり方であろうと考える。また人材育成を考えるなら大人から学ぶことはたとえ短期間でも多いので、教員、社会人（企業人等）とともに参加するプログラムに学生数名が参加するのによいと考える。

以上、海外PBLに関する所見等、ご報告致します。

海外PBL 参与観察と所見

小野寺 進

1、教員の同行について

今回、初めての海外PBLということと、プロジェクトを遂行する学生も初めての海外でしかもフランス語もそれ程話せるレベルではないということもあり、教員の同行がなければ成功裡に終わることはなかったという印象を受けました。仮に、このプロジェクトが英語圏で行われたとしても教員の同行は必要であったと考えます。特に2名の教員（1名がプロジェクトの補佐を、もう1名が海外での学生の滞在など生活面の補佐をしました）が同行したことがプロジェクトのスムーズな遂行につながったと思われま

2、学生のPBLプログラム遂行について

フランスに到着した当日から、長旅で疲れているにもかかわらず、プロジェクトを遂行する場所の交渉とその確保に積極的に行動しました。またボルドー大学では、ボルドーで日本語を勉強する学生たちと交流し、互いの文化や言語についてのやりとりを、キャンパスを飛び出してまで活発に行い、そ

の学生たちを巻き込んでプロジェクトを実施できたことは、学生の努力の成果と言ってもいいでしょう。丁寧に対応していただいた Maison du Japon「日本館」では、そこで日本語を学ぶ社会人に、弘前の文化について丁寧にフランス語を交えて説明・交流できたことは、学生の自信につながったと考えます。

また、次の訪問地のブーヴロンでは、私たち一行を歓迎してくれたカンブルメール地区観光局代表のクリスチャン・ボサール氏、ブーヴロン・アン・ノージュ副村長アラン・ベルジェ氏（ジャン＝ミシェル・ラヴェル デティエンヌ村長海外出張につき）、前村長ミシェル・カファール氏に対して、楽しく意見交換や交流を図り、社会人として接することの大切さを学ぶことができたようです。

3、海外 PBL プログラムという制度について

初めてこうしたプログラムに同行して、学生たちが異文化世界の中で体験することの大切や、言語を習得することの重要性を再認識いたしました。こうしたプログラムは単発的なものではなく、継続することで初めてその効果が現れるものと考えます。継続して交流をすることでお互いの認知度も上がり弘前大学の知名度を上げることにつながります（ちなみにボルドーでは名古屋からの学生が多く留学しているということを聞きました）。今回はフランスでしたが、機会があれば他の英語圏やドイツ語圏でも同じようなことを実施できるよう学生の意識向上を図れるよう、プログラム制度の継続を望みます。